

高岡市総合計画審議会 にぎわい部会 会議要旨

日 時 令和8年6月1日（月）午後6時～午後8時

場 所 高岡市役所議会棟 第一委員会室

出席者 別紙のとおり

1 開会

2 議事

(1) 第5次基本計画の「現状と課題」及び「施策の展開」について

(2) その他

《部会長》

資料 No. 3「高岡市の将来人口の見通し」のケース③において、2024年の合計特殊出生率1.15（全国平均）を用いているが、コロナ禍の影響があつての数値だと認識している。今後もこの水準が継続すると見込んでいるのか。

《事務局》

今後の全国の合計特殊出生率の推移については、コロナ禍が明けたことやこどもまんなか施策の推進などにより、状況は変化すると見込んでいる。2024年の数値を用いたことについては、あくまで本市の将来人口を推計するにあたり、国の現状が今後も継続すると仮定したものである。

《委員》

「国内外に向けた発信力の強化」について、コンベンションの誘致に力を入れてはどうかという意見が多い。観光協会が窓口となり歴史・文化、伝統工芸の体験プログラムを充実させてはどうか。

クルーズ船の寄港は、高岡の大きな強みであり、乗船客に対し、日本や高岡の歴史・文化を発信していくことが大切である。

《事務局》

本市においては、コンベンションに対する支援・補助メニューを持っている。現状はスポーツ系、合宿等の利用が多い。大規模な会議の誘致など積極的に情報を取り入れながら対応したい。

体験プログラムについては、ものづくり体験とお菓子作りをセットとした商品や地場産業センターでの体験メニューなど、高岡の観光の新たな魅力として定着してきている。

クルーズ船の伏木港への寄港は定着しつつある。寄港数が増え、市内への観光周遊客が増える中で、市民の意識が変わり、よりよい対応ができるようになり、また訪れてもらえるようになるかと思う。

《委員》

アルミ産業においては、高岡市は分別から加工まで、広く環境が整っている一方で、一般家庭からは多くのアルミがごみとして出されているのはもったいない。せっかくある環境をうまく使っ

て、高岡市をアルミで活性化出来たらよい。

《事務局》

これまで再利用できなかったものに関して、新たに再利用できる仕組みを作り、素材の提供や市場をつくっていこうと富山大学を中心に研究開発が進んでいる。広範囲でこうした取り組みができる地域というのは全国的にも珍しい。特にアルミに関しては、恵まれた環境にあると思っている。脱炭素先行地域に認定された本市の取り組みは、全国的にも注目されており、アルミ産業を中心としたサーキュラーエコノミーがしっかりと根付き、本市の強みとなるよう取り組んでいきたい。

《委員》

高岡は芸術文化のクオリティが高く、特に「高岡芸術祭」は他市町村にはない素晴らしい伝統文化であるが、継承者の高齢化、担い手不足が進んでいる。高岡の伝統文化の魅力を市民が良いものと理解しておらず、誇りに思っていない現状がある。芸術文化の分野について、総合計画にも重点的に記載することで市民の認識を高めていくことができるのでは。

高岡文化芸能館について、屋内の能舞台は富山と高岡にしかない。高岡市の貴重な財産として保全・活用していくことが重要と考える。

観光については、情報発信のあり方を考えていく必要がある。観光客の多くはパンフレットではなくスマホで観光情報を取得している。情報発信している方を支援する仕組みがあれば観光の振興に繋がるのでは。

《事務局》

「高岡芸術祭」は、地域の芸術文化の振興、市民が芸術文化に親しむ機会づくりということで始められたものであり、関係者の皆さんの大変な努力でこれまで続けてこられたと理解している。計画の中に力を入れて記載してはどうかとの意見もあった。より広く知っていただくことが重要であり、市として、こういった形で力添えできるか検討してまいりたい。

《事務局》

高岡の芸術文化を次の世代につないでいくことは非常に重要だと考えている。「ものづくりデザイン科」での取り組みも進めているが、この先、生業としてものづくりに携わってもらえるようになるためには、次のステップに進む必要性を感じている。子どもたちに「ものづくり」の現場を体験する機会を設けることができるよう検討してまいりたい。

《委員》

挑戦的な気持ちがある若者は、活躍の場を求めて東京などの大都市に出て行ってしまう。高岡での活動が、自身の成長や人の役に立っている実感、活躍し社会と繋がっている実感が持てる取り組みが必要である。高岡市における若者の動向を調査してみるのも良い。

伝統産業の担い手不足についても、貴重な技術が失われることが懸念される。市として何か対策や取り組んでいることがあるのか。

《事務局》

本市には富山大学芸術文化学部があることで、芸術文化という一定の指向性のある若者が高岡に集まってきている。ツギノテやミラレ金屋町など、伝統産業を中心に若者が様々な事業者との接点をつくりやすいと感じており、今後も大学・地域・行政等が協力し、高岡というフィールドの特性を活かした経験を若者に提供してまいりたい。

貴重な技術の継承については、デザイン・工芸センターで実施している「高岡市伝統工芸産業人材養成スクール」の中で、希少技術の継承を目的とした講座も開設している。こういった講座が必要か、業界の方々とともに検討し、技術をしっかりと残せるよう取組みを進めていく。

《委員》

コロナ禍が明けて、世界、社会が全く変わったように感じている。第5次基本計画においては、どういったところに力を注いでいくのか。

《事務局》

コロナ禍が明けて、社会も落ち着きを取り戻してきた。人口減少の流れは止められない中でどのような行政運営を行っていけば良いかということに関しては、基本構想でも議論させていただいた、市民一人ひとりのシビックプライドの醸成のほか、関係人口の創出・拡大に力を入れていく必要がある。（委員意見として）都会に出ていった若者が帰ってこないという話もあるが、高岡の魅力を再認識し、高岡に帰ってきてもらうきっかけをつくることが重要である。

《委員》

ぜひ進めていただきたいと思うが、もう少し具体的に伺いたい。

A I の登場でこれからの社会はとてつもなく変わっていく。これまでクリエイティブな仕事とされていたものはA I が担う時代が来る。そういった中で、私たちは子どもたちにどういった教育を与えていくべきなのか、高岡にはどういった魅力的な仕事をつくるべきなのか検討する必要がある。

東京都と富山県の給与には大きな差がある。東京都並みの給与水準に上げていくことは容易ではない。若者が胸を張って言えるような強みを持った計画にしていける必要がある。

《事務局》

デジタル化の波は早く、どんどん変化している。本市においても、こうした時代の変化に対応できるようD X推進方針を改定していくところ。A I やデジタル技術を正しく活用するための人材を育成していくことも必要であると考えている。

《委員》

市でできることは限られており、企業側が頑張らなくてはいけないと感じる。

大学生のこどもが東京で就職することになった。富山県には、仕事の選択肢があまりなかったこと、福利厚生面で東京の方が有利な条件が揃っていることが大きな要因である。2（2）働きやすい環境づくりの推進に「若い女性の転出超過が地域の労働力不足と人口減少を加速させている」とあるが、ものづくりやデザインの素地を持った方を世界に送り出しているという見方もできる。

高岡出身の人を高岡に戻すという視点だけでなく、高岡の産業に興味がある人たちを呼び込み、定住につなげるという視点が大事になってくる。

今、広告業界においても情報発信媒体の住みわけが非常に重要になっている。ターゲットとする年代ごとに適切な情報発信媒体を使い分けていくことが重要である。

5年間の計画を作成しているが、中心市街地の範囲は今後5年間変わらないのか。

《事務局》

「ふるさと住民登録制度」という国が進めている地方創生制度に、富山県と魚津市とともに高岡市が事業採択されたところ。ふるさと住民登録制度は、高岡に関わる人を見える化し、地域の活性化や担い手不足の解消を図るもの。この取組みを通し、高岡に興味を持ってもらい、関係人口を増やしていきたい。

情報発信媒体の活用については、より相手に伝わりやすい情報発信の仕方を検討していく。

《事務局》

本市の中心市街地の範囲は、中心市街地活性化計画において平成19年11月に採択を受けた区域である。現在、新たな中心市街地活性化計画の策定に向け、検討を重ねている。今の時代に合った中心市街地については、改めて考えていく必要があると考えている。

《委員》

中心市街地ってどこだろうと市民は思っている。しっかりとアナウンスすることが大切である。

《事務局》

中心市街地と言うと、普段皆さんが向かうような大型店があるようなエリア、現在栄えているエリアの方に目が向きやすく、法律上の定義とイメージが乖離しているのだと思う。この5年間で中心市街地の雰囲気が変わったことを感じてもらえるよう、市民の皆さんと一緒に検討してまいりたい。

《委員》

水田のフル活用ということで、稲の収穫後に大豆や麦を組み合わせているが、反収が減少傾向にある。天候不順もあるが、肥料や追肥の仕方など、県農林振興センターの方からの細かい指導が必要である。

高岡産食材を活用した学校給食の取組みは、とても良い取組である。お米を作るシステムなどを教えることで将来的に農業に従事することもたちが増えるきっかけになればよい。

日本の農業においては、担い手不足は最重要課題であると認識している。最近、サラリーマンをしながら農業に従事される方も増えており、こうした若い人たちを応援したいと思っているが、農業のイメージはあまりよくないのも課題であり、イメージを向上させる取組みも必要である。市としても継続的に支援していただきたい。

《事務局》

農業関係については、他の分野と比べると国を中心とした支援メニューが充実している。農業に

関しては、市役所には技術的な知見がないため、県農林振興センターやJAの皆さんのアイデアの検討の中で、行政としてお手伝いできること、支援できることを検討できればと思う。

学校給食に関しては、地元の食材を地域の子どもたちに食べてもらい、農業の現状を知るきっかけになればと考える。農業に対する理解を深め、いろいろな形で農業の楽しさ、必要性をしっかりと広げていけるような環境を準備する必要がある。

担い手の確保については、国の支援にないような高年齢の方の就農支援も実施している。新たに農業を始めるには、設備投資もかなり必要になる。情報交換させていただければと思う。

《委員》

助成や補助について、中小企業対象でも、ある程度力があって投資できるところが活用できるだけで、補助をもらっても負担が増えることを懸念して、一歩踏み出せない事業者が多くいる。

力強い産業を盛り上げていくためにも、小さい事業者を含めて底上げをしていく必要があり、ぜひ利用しやすい補助、何か助けになるような動きを市の方でも考えていただけるとありがたい。

賃金の引き上げについては、関東圏では多くの事業所で反映されているが、地方では反映されていないという地域差が発生していることもある。地元を盛り上げる、高岡が盛り上がっていくように、働きかけいただければありがたい。

《事務局》

本市では、しっかりと価格転嫁ができるように、生産性向上に繋がる設備投資をされる場合は固定資産税を免除するという支援も行っている。今後は、適正な物価スライドの中で適正な賃金上昇を図り、人材を確保していく流れになっていくことが予想されることから、融資や補助制度を活用し、支援させていただきたい。

省人化・省力化の中で、従来の従業員数だけでも生産能力を倍增できるような仕組みづくりに対しても支援できるような形にしていきたい。

《アドバイザー》

世の中は劇的に変化しており、関係性の変化が進んでいる。匿名大衆への大量生産・大量消費の時代から、個人がその場所、その時しかできない体験が求められる時代となった。労働力としての従業員も人的資本という考え方に変わっている。観光客との関わり方を見ても、おいしい、安い、といった要素だけではなく、人柄や風土といったものが重要視されることになる。

5年後、10年後どうありたいのかというバックキャストの考え方で、委員側から意見を出していくことが非常に重要である。また、そういった議論の場があってもいいのではないかなと思う。

高岡市がこれから何を目玉にして、何をアピールしていくのかを考えていくことが必要である。

《アドバイザー》

強い経済基盤をつくるためには、基本的に中小企業の粗利益率を高めていくことが必要である。原料高の中で価格転嫁を企業側に求めていくのは難しく、M&Aや補助金など様々な提案をしているが、うまくいかない現状がある。現在の情勢を見ていると、本日も意見があったように、今後の5年間は大きく様変わりしていくと思っている。

県では「寿司といえば、富山」とブランディングし、北陸すしアカデミーの卒業生が出た。高岡も鋳物や伝統産業などのものづくりの担い手育成をしていくことが、特徴ある将来につながるのではないと思う。

《部会長》

委員の皆様からいただいたご意見については、一旦、私に預らせていただき、修正が必要な箇所は修正し、今後の総会に提出する案を作成させていただく。本日は長時間にわたりご審議いただき、感謝申し上げます。

3 閉会

(以上)